

「心も体もシンクロさせよう。とび箱運動」の実践を通して

鳥取県岩美町立岩美北小学校 小林 祐介

1 はじめに

本研究会では、「いきいき・わくわく・みんなで取り組む 岩美っ子」をテーマに研究を進めている。過去二年間は、「体づくり」「体ほぐし」の領域での実践を中四国大会発表した。その成果の一つとして、「運動への目的意識の持たせ方を工夫すれば、意欲の高まりがみられた」ことが挙げられる。

そこで、本年度は、器械運動においても目的意識をはっきりさせることで意欲を高めたいと考え2つの仮説を立てた。

1つ目は、学習内容を明確し、個々の課題を意識するための指導方法や支援の仕方を工夫すれば、意欲が高まり、「できる」「わかった」をより感じる事ができるであろう。

2つ目は、仲間とのかかわりの場面を工夫すれば、互いのよさに気づくことで高め合うことができるであろう。

この2つの仮説のもと実践を行った。

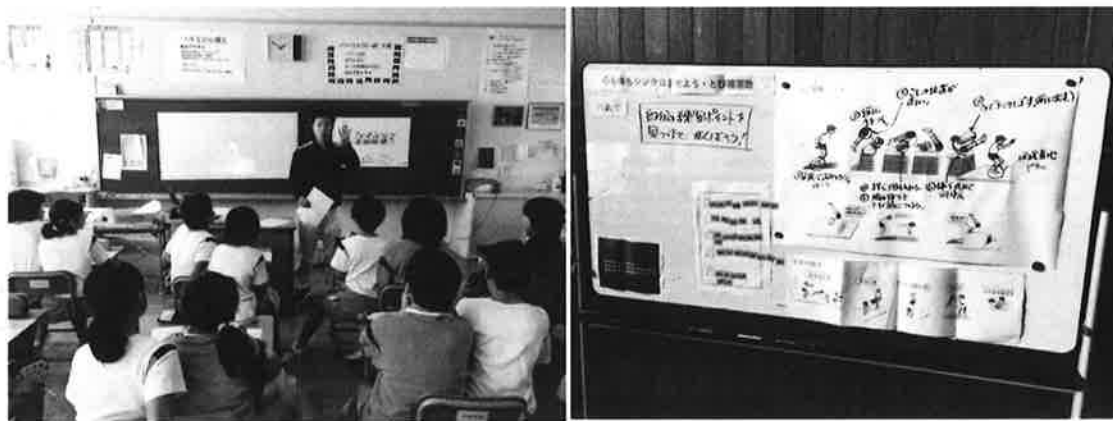


2 研究の実践

(1) 学習内容の明確化

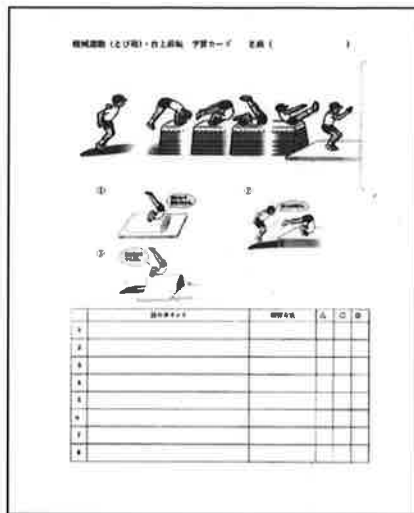
①NHKテレビ「はりきり体育之介」「私たちの体育」の活用

とび箱運動は、助走・踏み切り・第1空中局面・着手・第2空中局面・着地という一連の動作をリズムカルに行う運動である。しかし、児童にとっては、どのような技のポイントがあるのかが理解しにくい。そこで、まずは、児童に対して、技のポイントをはっきりと示すことにした。運動の模範となる姿を提示するために、事前にNHKの教育番組「はりきり体育之介」を視聴した。この番組は動画を用いて技のポイントを解説しているので、児童にとって、とてもわかりやすい内容となっている。また、また、同時に準教科書「わたしたちの体育」を拡大して見ることで、技のポイントを視覚的に捉えることにした。



②ワークシートの活用

技のコツを視覚的に捉えた後、自分の言葉でもまとめることができるようにするために、「わたしたちの体育」のイラストを載せたワークシートを活用した。技のポイントをイラストに書き込めるようにしたことで、より理解が深まることをねらった。



③タブレット端末 (ipad) の活用

体育では、児童が自分自身の動きを自分で認識することが難しい。したがって、友だちや教師からのアドバイスを参考にしながら自分の動きを修正していくことになる。ただし、言葉での教え合いには難しさがある。そこで、本年度より導入されたタブレット端末 (ipad) を活用し、動きを動画撮影したものを再生することで、児童相互で教え合いをすることにした。当初は5名に1台を使用していたが、時間がかかることもあり、3人に1台が使えるようにすることで運動量を確保することができた。



(2) グループ学習について

学習は常にグループを組んで行った。学習の前半では、運動の得意な児童とそうでない児童を意図的に組んだ。得意な児童の姿がモデルとなることで技能の向上をねらった。そして、互いに教え合い気づき合うことで技が向上すると考えた。また、学習の後半では、運動技能に応じたグループで学習することで互いに切磋琢磨しながら学習に取り組めるようにした。

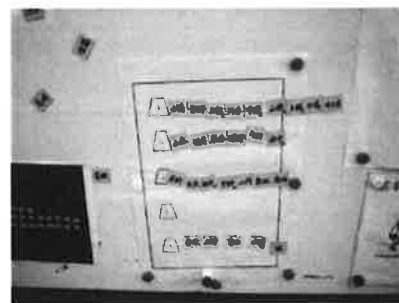
(単元の流れと評価の計画)

	1	2	3	4	5(本時)	6	7	8
主なねらい	学習の進め方を知ろう。	開きやくとびの完成度を高めよう。	台上前転の完成度を高めよう。	台上前転の完成度を高めよう。	かかえこみとびの完成度を高めよう。	かかえこみとびの完成度を高めよう。	技の完成度を高め連続技に挑戦しよう。	発表会をしよう。
技となる学習内容	学習の進め方、ねらい、できる技の確認	開きやくとびをより上手にして楽しむ	台上前転をより上手にして楽しむ	台上前転をより上手にして楽しむ	かかえこみとびをより上手にして楽しむ	かかえこみとびをより上手にして楽しむ	技の組み合わせ	遊び発表会
学習活動 (わかる・できる・ためす)	オリエンテーション ・学習のねらいや進め方を知る。 ・準備や片付けの仕方、約束を確認する。 ・技を試して、できる技、挑戦する技を確かめる。	基礎感覚づくりの運動・あての確認 活動① 自分の課題に合った場を選んで練習しよう。 ・やさしい課題(場)を設定する ・互いにアドバイスを送る。 活動② 友だち同士で教え合うなかで技の完成度を高めたり、新しい技に挑戦したりする。 技に挑戦しグループ内で教え合う。(ipadの活用) 学習のふりかえり					・連続技の組み合わせを考える。 ・連続技の練習	・連続技の練習 ・遊び発表会
評価の計画	関	③	④	②	②	②	①	①
思			①	②	①	②		
技					①			

(3) 評価の工夫

①ネームマグネットの活用

児童は、技能に応じた場を選択して学習を進める。その際に、選んだ場をネームマグネットで示すことにした。その様子を写真として記録することで評価に生かすことにした。



②タブレット端末の活用

学習の様子を記録しておき、学習後の評価に生かすことにした。

3 研究の成果と課題

(1) 成果

- ①学習内容を明確にしたことで、児童一人ひとりが、技のポイントを明らかにして学習に取り組むことができた。特に、模範となる動きとしてNHKの番組を視聴することが効果的であった。この番組は、様々な領域の運動を紹介してあるので、他の学習でも有効に活用することが考えられる。
- ②タブレット端末を活用することで、自分の課題をはっきりとさせることができた。また、上達したことも確認することができるので、意欲を持って学習に取り組むことができ技能の向上にもつながった。
- ③技のポイントをはっきりさせ、グループでの学習を行うことで、積極的に教え合う場面が見られ、技能の向上が見られた。当初は6人グループであったが、タブレットの数を増やして3人のグループとした。このような場面では、3人の方が発言する機会も増えるので、よりよくかわれることができた。
- ④体育では、評価の仕方に大きな課題がある。場がたくさんある中で一人ひとりの技能を確認することが難しいからである。本実践では、タブレットとネームマグネットの活用を行った。タブレットでは、児童の様子を映像として残すことができるので授業後に評価することができた。そして、個々の実態を把握し、次時に生かすことができた。また、「できた」瞬間を映像として児童と共有でき、一人ひとりのよさを認めることができた。ネームマグネットは、個々の運動の様子を一覧にすることができ、写真として記録することで評価に役立てることができた。

(2) 課題

- ①課題を明確にし、児童相互のかかわりを生かした実践を行ったが、技能が向上しない児童が見られた。全ての児童に技能を保障するため手立てを考えていきたい。
- ②課題に応じて場の設定をしたが、その選択を児童に任せてしまった。限られた時間の中で技能を向上させていくには、教師の働きかけが必要であると感じた。

